

慧日寺徳一廟石層塔の調査

埋蔵文化財センター

埋蔵文化財センターでは、福島県磐梯町、慧日寺境内にある石造層塔の調査をおこなった。これは同寺開祖、僧徳一廟として伝えられ、平安中期の作とされる。現存は三層であるが、仕口のおさまりなどから、当初は5層以上の層塔であったとも考えられる。石材は周辺産の安山岩。笠石の上部に上層の塔身を作り出し、上層笠石下面の仕口におさめる。初層の笠石下面4隅に、風鐸懸下用と思われるえつり穴を穿つ。その他の笠石には風蝕のためか、当初よりか、このえつり穴は見えない。初層の塔身は一石であるが、基礎石の仕口に合致しない。基礎石が、形状から、笠石再利用の可能性もある。2層の塔身に凹みがあり、そこから、舍利容器が発見されている。総高は相輪宝珠を含めて2.55m。基礎石南面巾は1.3m。

近年来破損がはなはだしく、倒壊のおそれもあることから、修復するはこびとなり、それに先立って、現況記録と修復に資する目的で、写真測量により、4側面図の作製をおこなった。実測基準投影面は、比較的風蝕の少ない初層南面下部の延長線とし、それに平行、あるいは直角に定めた。撮影は上下2段、器械高を変えておこない笠石による死角の出ないように努めた。また2層の塔身が、上層を支えることが不可能なほどけずられているため、五輪塔の石材で支えてあり、それが2層の塔身に死角を作っている。そのため、解体作業の途中で、支えをはずした状態の撮影を4方向よりおこなった。図中破線図示したものがそれである。図化に使用したステレオ写真は、各面、上下、2対と、五輪塔、風空輪をはずした3モデル、計12モデルである。図化法は2.5mm間隔の等高線表示とし、輪郭線、稜線は全く図示していない。このような、風蝕のはなはだしい石造物は、この方法によると、主観をまじえることなく、稜線を表示することが出来、必要に応じて図上より捨い出すことが容易にできる。原図縮尺は1:3撮影はカールツアイス社製、SMK-40ステレオカメラ、図化はウイルド社製、オートグラフA-7を使用した。なお図化作業は、国際航業株式会社に依頼した。（安原 啓示・伊東 太作）

石層塔南立面図（方眼は50cm間隔）